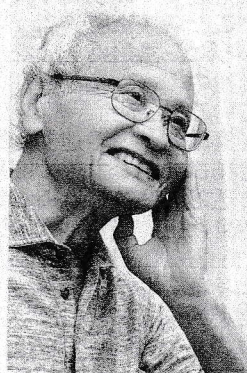


古井由吉さん死去

82 歳

内向の世代「杳子」「栖」



日本の純文学作家の最高峰の一人で「内向の世代」を代表する古井由吉（ふるくい・よしきち）さんが18日、肝細胞がんで死去した。82歳だった。葬儀は近親者のみで営んだ。喪主は妻杳子（えいこ）さん。

東京生まれ。空襲を受け岐阜に疎開、終戦を迎えた。東京大学でドイツ文学を学び、20代は金沢大学や立教大学で教えながら翻訳もてがけ、作家になった。1971年に「杳子」で芥川賞を受賞。個人の内面を重視する「内向の世代」の代表格となる。80年「栖」で日本文学大賞、83年「種」で谷崎潤一郎賞、87年「中山坂」で川端康成文学賞、90年「仮往生伝試文」で読売文学賞、97年「白髪の内」で毎日芸術賞と主要な

文学賞をほぼ受賞。その後は賞を辞退した。東日本大震災の後、2011年4月から1年間、仙台で被災した作家佐伯一麦さんと朝日新聞で往復書簡を続けた。焼け跡の記憶と高度成長期のひずみを個人的な実感から普遍的に描いた。

た。熱烈な競馬ファンで、日本中央競馬会の機関誌にエッセーを連載。芥川賞の選考委員を86年から務め、05年に辞任後も朗読会や講演会などは積極的に行い、後進を育てた。12年には集大成となる「古井由吉自撰作品」（全8巻）を刊行した。

「あきらかに最良の日本語の文章を作り上げた人」。ノーベル賞作家の大江健三郎さんが、そう敬意を表する作家だ。初期作品から、男女の関係の苦しさや、精神的に追い詰められていく人を緻密に描いてきた。高度成長期の普通のサラリーマンの内面にふれ、「いながらに

考え抜いた言葉 思考つむぐ

評伝

「あきらかに最良の日本語の文章を作り上げた人」。

て死んでいる」といった表現などで、戦後の社会が奥底に抱えていた傷に光をあてた。

「内向の世代」の作家は、社会問題やイデオロギーなどと距離をおいていると批判も受けた。しかし、その代表格である古井さんは、あいまいさも含めた記憶という個人的なものを探ることで、人間と社会に迫

ったといえるだろう。創作の源の一つは空襲の体験だ。7歳で見た焼け跡の風景や死者たち。「野川」（04年）では子ども時代の戦争の記憶が印象的だ。「蝸の声」（11年）では空襲の記憶と東日本大震災の一日を重ねた。

近年も「老来ますます冒険的となる短編小説連作」（大江さん）を発表し続けた。13年の取材時、閉塞する時代について「成長を夢見るより、限界を見通して社会を変質させるべきではないか」との見方を示した。社会が複雑になる一方、人々が考えを伝えあう言葉が衰えたことを危惧していた。対処法を聞いた記者に、「その職業や立場の中で言葉を鍛えておくこと。まずは、一つ呼吸を長くする」と。決まり文句や時流の新語に頼らず、自分で考え抜いた言葉で思考を

つむぐことの大切さを教えてくれた。

（読書編集長・吉村千彰）